泉
いずみ

ー目次ー

表紙「鬼」
「コラム百折不撓」住職
連載「ハヤブサ物語14」
教え子の「満中陰」
ハザード会・コロナ禍の寺院への避難
二〇二〇年安泉寺訪問者
連載「共に生きる②」老僧
さとりの知恵を読む「虎への捨て身」
掲示板・お知らせなど

絵：後藤信英

年の豆　我が身の鬼に　食わせけり　　博子

発行責任者：安泉寺　住職　野呂大悟　　住所：〒496-0945愛西市三和町中ノ割173-1 電話：0567-28-0001

コラム「百折不撓」

野呂大悟

寒い毎日が続いていますね。体調はいかがでしょうか？コロナもまたまた感染爆発と言っていいでしょう。収束までには数年かかるとも言われ、もう共存していくしかないのでしょうか。何とか、安心できる世を1日でも早く祈るのと、命を懸けてコロナと闘う医療従事者の方々に感謝の想いを忘れず、私たち一人ひとりが気をつけていくしかありません。

私も、仕事が仕事だけにコロナには充分に注意しなくてはなりません。しかし、いざとなれば仲間とともにコロナに恐れずに、立ち向かわなければならないときも来るかもしれません。そんな覚悟も抱きつつ、できる限りの対策を考えています。

しかし、コロナの影響は至るところに発生しています。入院したくても、入院できず、コロナさえなければ、もっと苦しまなくても済む人たちも多いはずです。私もそんな方々に向き合っています。

そんなこんなで、休日も休まずに、踏ん張らないといけない事も時にあります。そんな中、共に仕事を行う仲間から、先日こんなメッセージが私の携帯に届きました。一部を紹介させていただきます。

僕は今日、日曜日の夕方から仕事へ行く事を子供に伝えました（子どもたちは遊びたいようだったので）。

その時に、子供へなぜパパは仕事に行くのか伝えました。「パパは困っている人のお助けをするために行くんだ、でもパパだけでなく、君達もその人の事を一緒に支えているんだよ。なぜなら、君達が少しパパと過ごす時間を我慢する事で困っている人に役に立つ事になるんだよ。ありがとう。

一緒に困っている人の助けをしようね。」

子供達から笑顔で「分かったよ、頑張って！！」と言われました。

僕たちは、一人だけでは支援はできません。家族や関わる人の理解も必要です。家族や仲間が同じ目的、目標を認識する事で絆ができる事を実感しました。

支えている事がスゴイ事ではないと思います。困っている人がいる時、当たり前に助けられる人がいる。それが、生きるための福祉であると感じます。

そんな時に自分だけではなく、地域や関係する人全てで支えていく事ができれば、もっとみんなが生きやすい社会になるのではと思いました。

覚悟しました。

これからも全力で必死に自分の強みや得意を活かして一人でも多くの人の役に立つ人間でありたい。

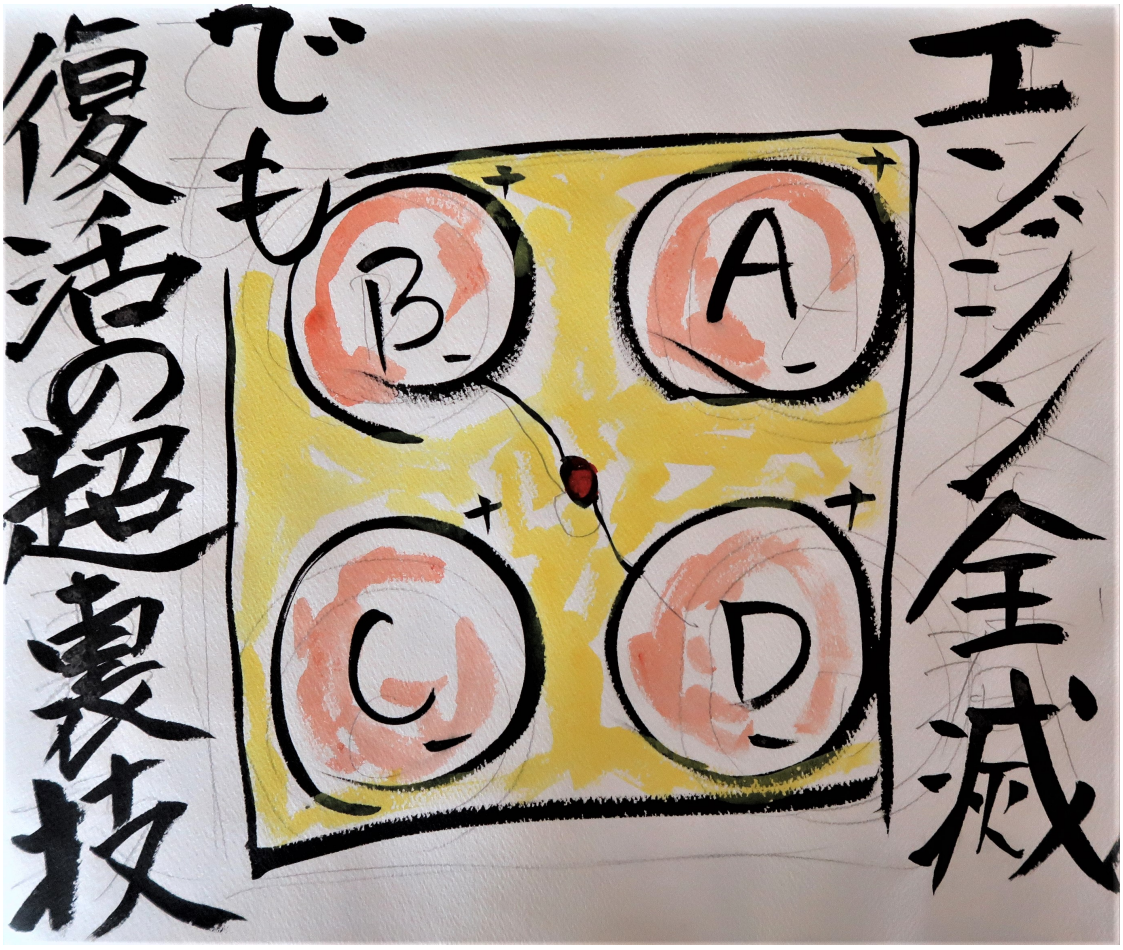
そう強く思います。

この気持ちをみんなが持てば、もっと良い世の中になりますね。

働き方改革が進む中、仕事に多くの時間を費やして賛否はあるかもしれません。しかし、誰かのために、生きづらさを感じている障がいのある人のために、全身全霊で向き合っていく姿勢と想いが込められた決意に心打たれました。家族、仲間、色々な人の支えと理解で仕事が出来る。その任務を全う出来るのは支えてくれる人がたくさんいるからだと、私も実感しながら、感謝しながら全身全霊で頑張ろうと思います。

発行責任者：安泉寺　住職　野呂大悟　　住所：〒496-0945愛西市三和町中ノ割173-1 電話：0567-28-0001

連載「ハヤブサ物語」14　野呂美道



◆さて、僕の話に戻そう。僕は地球のスタッフの尽力によって、何とか帰還できることになった。みんなが待っている懐かしいふるさとだ。僕は嬉しくて嬉しくて、満身創痍の身体を奮い立たせながら、慎重に旅を続けていた。◆でも、ここで僕の身の上に、絶体絶命のピンチが起きてしまった。メイン推進力のイオンエンジンが、耐用年数をはるかに超えて運用したため、プラス側の中和器という大切な部品がほとんど壊れてしまったのだ。◆エンジンがすべて停止してしまった！◆もう僕は地球に還る手段が無くなってしまったのだ！◆僕は宇宙のごみとなるかも知れない。…しかし、この危機を救ったスタッフがいた。（続く）

発行責任者：安泉寺　住職　野呂大悟　　住所：〒496-0945愛西市三和町中ノ割173-1 電話：0567-28-0001

教え子の「満中陰」

野呂美道

◆1993年（平成5年）卒業の教え子、岩村君が亡くなった。享年46歳、これからという時の突然死だった。2020年12月30日、名古屋の髙田派の寺院で満中陰の法要が行われた。岩村君の親友の渡辺のたっての希望で、私が招かれた。◆年末の慌ただしい時ではあったが、親族・仕事関係者・友人・恩師ら十数名が集まった。その時、私の脳裏に彼らが在学中の数々の思い出が蘇った。◆岩村君は少し生意気な生徒だった。授業中必ず教師を扇動する質問をした。それでどれほど授業が脱線した事だろう。◆卒業式近く、英作文の授業で「.....but,I dont.」という例文を作成することになった。岩村君の発表した文は次のようなものだった。「I wanto to graduate from Doho high school, but I dont.」（同朋高校を卒業したし、でもそうでもなし。）つまり、早く卒業したいとは思うけれども、友人や先生、数々の思い出のある母校に対する未練もあり、卒業したくない気持ちもあるという絶妙な心の動きを現わした彼流の文章だった。私はなぜか昨日の事のようにそれを思い出す。◆元同僚の米澤氏と語っていて、修学旅行の傑作シーンを思い出した。渡辺はじめ、彼ら数人の元気グループは当時担任であり、指導部長の石田先生を恐れていた。その風貌から彼は「フセイン」と呼ばれた。対して渡辺岩村グループは「イラク兵」と呼ばれた。当時は湾岸戦争まっただ中の世界情勢だった。◆修学旅行で、沖縄の国際通りを巡回中の私たちは、通りの向こう側を歩いている彼らを見つけた。フセインを目撃した彼らは何も悪いことをしていないのに、条件反射的に、丁度やってきた乗り合いバスの陰に隠れた。私たちはじっと彼らを見ていた。やがて、バスが動き出した。彼らもバスの陰に守られて無事移動するはずだった。◆しかし、大いなる誤算が待っていた。次第にバスは速度を上げ、彼らのスピードを遥かに上回ってしまったのだった。◆必死でバスを追いかけるブザマな彼らの姿を見て、フセインはじめ私たちは腹の皮がよじれるほど笑い転げた。◆岩村君の在学中、生徒と教師との距離は節度を守りつつも近かった。彼らもそれを知っていたからこそ、ちょこちょことした悪さをしては私たち教師と楽しいコミュニケーションをとっていた。◆岩村君は感じているだろう。「浄土には行きたし、でもそうでもなし（but,I dont）」と。

発行責任者：安泉寺　住職　野呂大悟　　住所：〒496-0945愛西市三和町中ノ割173-1 電話：0567-28-0001

ハザード会・コロナ禍の寺院への避難　野呂美道

◎ハザード会の報告

◆十二月二五日午後、会員有志は田尻地区の調査に出かけた。風の強い日だった。神社の社の高さを測り、十人が避難できることを確認した。堤防に逃げる時間も測った。◆後日二日間をかけて、逃げ地図を完成させた。各戸から避難場所までどれくらいの時間がかかるかを色分けで示した。以前の大雑把な地図よりはより実用性が増した。

◎行政から仏教会への依頼文

◆県と各自治体から、コロナ禍における避難所について、寺院への協力要請の文書が届いた。何を今さら、というのが私の率直な感想だ。◆東京都を始め、全国自治体が宗教施設に災害時の協力を求めるのは今や常識である。いや、そうではなく、ずっと以前からお寺は災害時の避難場所だった。瀬戸市、西尾市などは、行政の方から寺院に避難所の要請に出向いている。◆愛西市はどうか。広域避難ばかり呼びかけて、寺院への避難の働きかけは極めて慎重、尻込み状態だ。◆耐震強度がない、低い土地では浸水する、そういうマイナス要因ばかり強調してOKを出さない。責任を問われるからだと思う。◆それは分からないでもないが、いざ災害が起きた時、各地域には防災対策を練る場所が必要だ。何はともあれ、寺院に集結して対策本部を打ちたて、対応する。そういうルールを決めておくだけで、最初の混乱は整理できるであろう。◆起きてから慌てふためく前に、まず最初に集結する場所を決めておく。次は誰がリーダーとして仕切るかを決める。さらに現状把握と、対応をどうするか、自治体とタイアップして進める。◆そういう初期対応を怠ると、混乱を深めるだけだ。自治体はもっと積極的に地域の自主防災を進める啓蒙活動を活発化するべきだと痛感、南海トラフ地震への備えの甘さを感じる。

堤防までの避難を確認する

◎東日本大震災十周年

◆この三月で、震災から十年になる。時間の流れの速さを感じる。私たちが交流を続ける女川町の竹浦集落、あるいは仙台市若林区の海楽寺のみなさん、彼らと十年来の交流の意味を考えたい。◆あわせて神戸の震災から二十六周年だ。私と妻は神戸の友人とも交流している。震災と復興、そして未来の子供達へ災害のメッセージをいかに残すか、そんなことを考えるこの頃である。

発行責任者：安泉寺　住職　野呂大悟　　住所：〒496-0945愛西市三和町中ノ割173-1 電話：0567-28-0001

2020年安泉寺来訪者数一覧

番号	項目	内　　容	人数
1	仏事関係	報恩講・永代経・葬儀・法事・月参り・おひもどき・遺族会・偲ぶ会・組会等	434
2	学習関係	習字・寺子屋	1001
3	公的集会	和讃講・老人クラブ・環境保全	324
4	防災	ハザード会・自主防災会・マスク	135
5	趣味の会	文芸クラブ・写真クラブ・蓮ワーク・同窓会役員会	153
6	来訪者		199
7	業者	電気工事・屋根修理・コンピュータ等	25
		総計	2271

講評

◆昨年より1,000人近く減少しています。コロナの影響が大で す。しかし、その分、寺子屋や学習関係で寺をよく利用してくれました。また、法事や葬儀月参りなどで寺を利用して下さる檀家さんも増えています。 ◆公的機関から会場を安泉寺に移した写真クラブ・文芸クラブも定着しています。◆防災関係のハザード会も地道に継続しています。◆地域への貢献として、環境保全の起点に安泉寺がなっていることを誇りに思います。

目標

◆2021年は再び総計3,000人をめざして、安泉寺に多くの人びとが集っていただけるよう、あらゆる努力を惜しまない決意です

発行責任者：安泉寺　住職　野呂大悟　　住所：〒496−0945愛西市三和町中ノ割173−1 電話：0567−28−0001

新連載「共に生きる②」

野呂美道

◆戦後、韓国の木浦（モッポ）に父のユン・チホは夫婦で児童養護施設「共生園」を立ち上げ、田内はここで生まれ、育った。当時は300人以上いた孤児も今では6分の1に減り、55名が暮らしている。最近は親から虐待を受けたり、貧困家庭の子供が多くいる。6名ずつのグループで暮らしているが、設立当初は15～20名で暮らしていた。夜は大きな蒲団に足だけ入れて寝ていた。320名の孤児は3回に分けて食事をし、おかずは大根一切れの時もあった。◆90年前、父が作った孤児院は、朝鮮戦争が勃発して、550人の孤児で溢れかえった。そんな中、田内が8才の時、大変なことが起きる。食料を求めて出かけていった父が行方不明になったのだ。大変な事態になっても母千鶴子は孤児院を切り盛りすることに奮闘し、長男を特別扱いすることは一切なかった。彼は寂しさのあまり、母を恨んだ。「夜、みんなが寝静まってから私を抱いて美味しいものをくれてもいいのに。」運動会でも母は彼と目を合わせることもしなかった。◆彼は寂しさのあまり、母を困らせることをした。勉強をせず、学校にも行かない。よく海へ行って遊び、砂を取ってきた。スープに砂を入れ母を困らせようとしたが、無口な母は無反応に見えた。◆食べ物がなく、一日にお粥2杯がやっとの生活だった。その時、彼は孤児を一途に愛する母の姿に打たれる。死んでゆく孤児の身体を拭いて一夜を共にする母の姿を見た。「せめて一晩でも通夜をやってやりたい。」◆彼が大学入試の手続きで戸籍謄本を取り寄せる時、衝撃を受けた。なんと彼は日本国籍であった。母は黙していたが、重い口を開いた。「実はお前は日本人だ。帰化しようとしたが、時間がなく、今日にいたった。お前はユン・ギじゃなく、田内基、高知県に本籍がある。」と言ったのだ。彼は困って悩み、いつものように海に行って泣いていた。◆その時、彼に声をかけてくれる者がいた。孤児院で兄貴分のポムチだった。泣いている田内を抱いて、「この俺を見ろ。俺は戸籍もないんだぞ！　でもちゃんと生きている。ちゃんと前を向け！　戸籍なんかなくても生きていけるぞ！」「今一番孤独なのはお前のお母さんだ。お母さんは、息子に本当のことを打ち明け、深く悲しんでいる。お前はお母さんのところに行って、お母さんに感謝し、悲しませないようにしろ！」彼はポムチの逞しさに心を打たれ、急に世界が明るくなったように感じた。

（続く）

発行責任者：安泉寺　住職　野呂大悟　　住所：〒496-0945愛西市三和町中ノ割173-1 電話：0567-28-0001

昔、薩埵（さった）太子という王子がいた。ある日、二人の兄の王子と森に遊んで、七匹の子を産んだ虎が飢えに迫られて、あわや我が子を食べようとするのを見た。

二人の兄の王子は恐れて逃げたが、薩埵太子だけは身を捨てて飢えた虎を救おうと、絶壁によじのぼって、身を投げて虎に与え、その母の虎の飢えを満たし、虎の子の命を救った。

薩埵太子の心は、ただ一筋に道を求めることにあった。

「この身は砕けやすく変わりやすい。いままで施すことを知らず、ただわが身を愛することばかりかかわってきた自分は、いまこそこの身を施して、さとりを得るために捧げよう。」

この決心によって、王子は飢えた虎にその身を施したのである。

今光明経（こんこうみょうきょう）より

◎仏陀の前世での修業とは

この物語は、仏教の開祖であるブッダがこの世に生まれる前に、さとりを求める菩薩として修業をしていたときの物語として伝えられてきた「ジャータカ」のひとつです。いうまでもなく、この薩埵太子がブッダの前世の姿で、そのようにして善業をつみ、何度も何度も転生してから、この世に生をうけたのだといいます。

紀元前五世紀ごろ、ネパールの釈迦族の王子として生まれたブッダは、二九歳の時に王宮の生活を捨てて一介の修行者となり、六年後にさとりを開いてブッダ（目覚めた人）と呼ばれるようになりました。

それは、まぎれもない歴史上の事実です。

しかし、その教えを聞いた多くの信者たちは、ブッダはたった六年の修行で仏に成ったわけではないと考えるようになりました。ブッダはこの世に生まれる前から、さまざまの善を行い、さとりを完成する準備を整えてから、この世に出現されたのだと受け止めたのです。

このような思いから、ブッダの前世の物語が数多く語り継がれてきました。

ブッダが過去世に行った善のほとんどは、他の者の幸いのために自分の身を捨てるという慈悲の行為でした。そして、その説話に示されているように、その慈悲の心は人間だけでなく、すべての生きとし生きるものに向けられていたというところに注目すべきでしょう。

さとりを開いてブッダに成ったということは、自己と世界のあるがままの真実を見る智慧を得たということです。

ではその、あるがままの真実とはいったいどういうものなのでしょうか。

発行責任者：安泉寺　住職　野呂大悟　　住所：〒496-0945愛西市三和町中ノ割173-1 電話：0567-28-0001

◎自分のために捧げられたいのち

わたしたちはいつの間にか、自分が生きているという思いにとらわれて、「私の体」「私の心」「私のいのち」というように、すべてを自分の所有物であるかのように思いこんで暮らしていますが、それは本当の自分ではないのです。

「生まれようか、どうしようか」と考えたあげく、「よし、生まれるぞ」と決心して生まれた人はいません。父と母からいのちを受けつぎ、この世に誕生させてもらったのではないでしょうか。そうして、生まれたから今日に至るまで、三度三度の食事の中で、魚のいのち、鳥のいのちというように、数えきれないほど他のいのちを奪いながら、生きてきたのです。

それなのに、私のいのちは私のものだ、どう生きようが私の勝手、あなたには関係ない、などと思いこんできたのではありませんか。

それが薩埵太子のいう、「ただわが身を愛することばかりにかかわってきた自分」ということなのです。

飢えた虎のために自分のいのちを捨てるという物語は、とてもありえない空想的な話のようですが、自分のいのちが、他のいのちの犠牲によって支えられているという事実に眼を向けたとき、真実の自己に目覚める扉が開かれます。

生きとし生けるものはすでに、自分のためにいのちを捧げてくれているのです。その恩恵に対して、私たちははたして報いる生き方ができているでしょうか。

もちろん、虎にわが身を差し出すことなどとうていできそうにありませんが、せめて何ほどか、他のものの幸いのために自分の人生を捧げるという思いで生きていきたいものです。

発行責任者：安泉寺　住職　野呂大悟　　住所：〒496-0945愛西市三和町中ノ割173-1 電話：0567-28-0001

二月の行事予定

昨年末の除夜の鐘は急遽中止いたしました。

二月の予定につきましては、緊急事態宣言を受け当面の間活動を延期とさせていただきます。ご了承ください。

今月の掲示板

人は、昨日にこだわり
明日を夢見て
今を忘れる

今というのは瞬間瞬間に過去になっていくものです。でも、今を命がけで生きる必要はありません。ゆったりと心を落ち着けて、生きている喜びをかみしめていけばいいと思います。あらゆるものが自分を生かしてくれていることに一秒でも感謝できればいいと思います。（老僧記）

訃報

青木利之さん　桑名市　享年九十一才

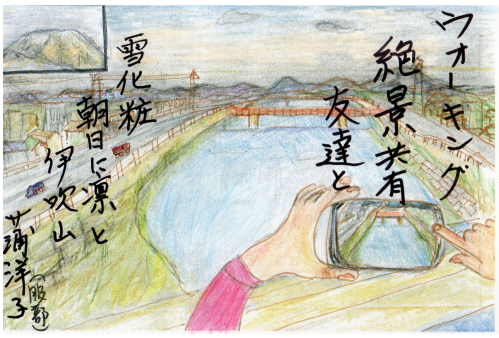
横井二三子さん　三和町　享年八十一才

編集後記（野呂大悟）

◆最近仕事でのオンライン会議が増えています。一日に4回・5回と会議をこなすこともしばしば…。何せ移動せずに職場からでも家からでも会議ができてしまう。便利ではありますが、深夜まで会議が終わらない事もあります。良くも悪くも笑。

オンラインはコロナで集まれない時期でもきちんと情報共有ができる大切なツールです。「情報を得る」事は＝命を繋ぐためには欠かせない事だと思います。災害の時と同じですね。上手に使いこなせれば、大きな力を発揮できる大切な技術だと感じています。

◆Kさんからの絵手紙です。



発行責任者：安泉寺　住職　野呂大悟　　住所：〒496-0945愛西市三和町中ノ割173-1 電話：0567-28-0001